

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3207号 2016.8.23 発行

【パラリンピック】19歳少女の競泳挑戦！「何かを感じ取ってもらいたい」 一ノ瀬メイ、8種目に出場 産経新聞 2016年8月23日



近畿大学のプールで練習する一ノ瀬メイ。ダイナミックなフォームが持ち味だ=大阪府東大阪市

9月7日（日本時間8日）に開幕するリオデジャネイロパラリンピックに、19歳の新鋭が挑む。競泳女子で8種目に出場する近畿大2年、一ノ瀬メイだ。生まれつき右手の肘から先がないが、それを自身の個性として受け入れ、選手として着実に成長を遂げてきた。「何かを感じ取ってもらいたい」。4年後の東京パラ競技の盛り上がりにつなげる泳ぎをしたいと意気込んでいる。

（川瀬充久）

一ノ瀬メイ(いちのせ・めい)のプロフィール

- 生年月日:平成9年3月17日
- 出身地:京都市
- 身長/体重:165^{センチ}/57^{キログラム}
- 障害の種類:先天性右前腕欠損
- 所属:近畿大学
- 趣味:タップダンス、バレエ
- 座右の銘:目は遠くを足は地に

英国人の父と日本人の母との間に生まれる。2010年に中国・広州で行われたアジアパラに史上最年少の13歳で出場し、銀メダルを獲得。2012年ロンドンパラ出場は逃したが、翌年のアジアユースパラで100^{メートル}背泳ぎで優勝するなど活躍。強化指定選手に選ばれた

英国人の父と日本人の母との間に育った。水泳を始めたのは1歳半のとき。京都市左京区の自宅近くの障害者スポーツセンターだった。右手は短いが、周囲の子供に泳ぎでは負けはしなかった。



本格的に競泳の道を進もうとしたのは9歳のとき、関係者からの勧めだった。だが、水泳教室の選手コースへの入会を求めると、体を一瞥（いちべつ）され、断られた。「泳ぎすら見てくれることはなかった」という。

それまで母からは、右手が短いことを背が高いとか低いといった個性のひとつで、隠す必要はないと育てられてきた。入会を拒否されたことで初めて障害を意識させられ、「悔しい思いをした」と振り返る。

小学4年のときに母に伴われ英国に留学した際も衝撃を受けた。日本では練習環境を整えるのに嫌な思いも味わったが、英国で競泳教室に入ろうとすると、何の違和感もなく受け入れてくれた。

人数が調わず大会も開けない日本と違って障害者の選手層も厚く、あまりの環境の違いにがくぜんとした。

そして、自らの泳ぎで日本でも道を開いていきたいと強く感じたという。

競泳に一層没頭し、13歳で出場した2010年のアジアパラでは、50メートル自由形で銀メダルを手にするなど躍進を続けてきた。前回のロンドン大会は規定時間に0・31秒届かず出場は逃したが、リオへの切符は着実につかんだ。

「(2020年の)東京でパラスポーツを知ってもらっても、それでは遅い」。一ノ瀬は

そう思っている。だから、リオを見てほしいと、パラ間近にもかかわらず、数十社にも及ぶ取材に、可能な限り応じてきた。

『腕がないのにこんなにも泳げるんや』とかでもいい。何かを感じてほしいんです。そうすれば、東京では五輪と同じくらいパラも盛り上がるはず」。リオで懸命な泳ぎを見せると誓った。

日本選手127人、9月7日開幕

視覚障害者を含む身体障害者を参加対象としたリオデジャネイロパラリンピックは、9月7～18日の12日間の日程で陸上や車いすテニス、視覚障害者による5人制サッカーなど22競技に、160以上の国と地域が参加して行われる。

今大会から新たに加わった競技は、トライアスロンとカヌー。障害の程度などで細かくクラス分けされ、種目数は528に上る。

パラは今回のリオ大会で15回目を迎えるが、前回のロンドン大会で164カ国が参加した。日本の参加は、1964年の東京大会からで、その東京では金1個を含む計10個のメダルを獲得している。

リオでは、日本は17競技に127選手を派遣。金メダル10個の獲得と、メダル獲得ランキングで10位に入ることを目標にしている。

News Up だから “オリンピック”

NHK ニュース 2016年8月22日



22日に閉幕したリオデジャネイロオリンピック。スポーツの世界で頂点を競った熱い戦いとともに、とりわけ印象的だったのが、故郷を追

われた難民選手団の活躍など、宗教や文化を越えた各国の選手たちの頑張りや温かい交流の姿です。そうした、オリンピックという“平和の祭典”の断面を、著名なアメリカの国際政治学者が「だからオリンピックをやるんだ」という言葉とともに、ツイッターで世界に発信していました。

世界情勢のリスク分析のプロが見たオリンピック

「This is why we do the Olympics(だから私たちはオリンピックをやるんだ)」オリンピックの期間中、この言葉で締めくくる数多くのツイートが世界を駆け巡りました。

国際社会が抱えるリスク分析で国際的に高く評価されているアメリカの政治学者、イアン・ブレマーさんの言葉です。

新興国の影響力の増加でアメリカの相対的な影響力が低下している国際社会の現状を、リーダー不在の「Gゼロ」の時代と名付けたことで知られています。

北朝鮮と韓国の選手が仲よく

「北朝鮮と韓国の体操選手と一緒にセルフィー（自撮り）をしている。だから私たちはオリンピックをやるんだ」（8月5日のツイート）

ツイートには、体操の女子で北朝鮮と韓国の選手がスマートフォンで仲よく自撮りする様子をとらえた画像が添えられました。

ネット上では、「韓国の選手と一緒に写真を撮って、帰国後、大丈夫なのかな」などと心配する声が上がった一方で、「これぞオリンピックだ」「オリンピックってこうあってほしい」といった前向きな書き込みが広がり、これまでに2万回以上リツイートされました。

ヒジャブとビキニ どちらが自由？



ビーチバレーのエジプトとドイツの試合の写真も「だから私たちはオリンピックをやるんだ」という言葉とともに投

稿されました。

長袖のシャツとパンツに、ヒジャブと呼ばれるイスラム教徒の女性が頭を覆うスカーフをかぶったエジプトの選手とビキニ姿のドイツの選手が、ネットを挟んで競り合っています。

イギリス、BBCの電子版によりますと、前回のロンドンオリンピックでビキニの着用義務がなくなり、今回のリオで初めてヒジャブの着用が認められました。

この写真、一部の海外メディアは、「文明の衝突だ」と報じ、議論を呼びました。

ネットでは、「文明の衝突ではなく共存のよいテストケースになればいいのに」といった書き込みのほか、「女子がビキニを着なければいけないのは見ていてなんてばかげているのだろう」といつも思っていた」「各自の信条で好きなものを着ればいいのに」などといった書き込みがありました。

ヒジャブをつけてプレーしたエジプトの選手はAP通信の取材に対し、「ビーチバレーは私が好きなものの1つであり、ヒジャブだからやらないということはありません」と答えました。

ブレマーさんは、「仮に社会の規範がなかったとしたら、本当に着たいウェアを着ているのはどちらだろう」と続いて投稿、オリンピックのビーチバレーで長年ビキニが義務づけられてきたことへの疑問も投げかけました。

嘆きのツイートも

「哀れだ。オリンピック精神に反する。残念だ」（8月13日のツイート）

ブレマーさんが、嘆きの言葉とともに投稿した記事もありました。

柔道男子の100キロを超えるクラス、試合のあと、勝ったイスラエルの選手が、エジプトの選手に握手を求めたところ、後ずさりして拒んだシーンです。

ロイター通信によりますと、エジプトの選手は、イスラエルの選手と握手をしたくなく、

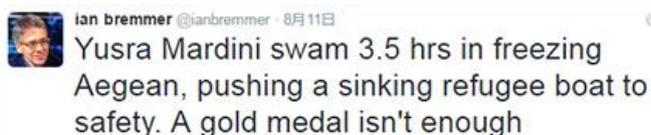
柔道のルール上も握手をする義務はなかったと主張しましたが、I O C = 国際オリンピック委員会はオリンピック精神と、フェアプレーの規則に反するとして懲戒処分をしました。

ネットでは「柔道精神が宗教のあつれきを超えられなかった」といった声や「拒否したのはよくないけど、握手したことで家族などが危険にさらされる可能性もあるだろう」「握



手って選手が自発的にするもので強要するものではないのでは」などといった声がありました。リオ五輪が残したのも、そして東京へ

開催地のブラジルは、先住民やブラジルに渡ったポルトガル人をはじめ、アフリカから



の奴隷や日本などアジアからの移民が融合してきた多民族国家です。

開会式では宗教や人種、考え方の違いなどから紛争やテロが激化し、多くの人たちの命が奪われている世界の現状に対して、「違いは乗り越えられる」という強いメッセージが発信されました。

複雑な国際情勢を鋭く分析してきたブレマーさんの「だからオリンピックをやるんだ」という言葉にも同じメッセージが込められて

います。

今回のオリンピックでひときわ注目を集めたのは難民選手団でした。

戦火や迫害を逃れるため母国を離れた難民の選手たちに、オリンピック出場の機会を与えようと初めて結成され、ブレマーさんもツイートしました。

「ユスラ・マルディニは沈みかけた難民ボートを押しながら、凍えるエーゲ海を3時間半も泳いだ。金メダルでも不十分くらいだ」（8月11日のツイート）

シリア内戦のため、国を追われたマルディニ選手は競泳女子の100メートル自由形とバタフライに出場、予選で敗退しましたが、観客からは温かい拍手が送られました。

ネットでは「登場したとき涙が出た。東京五輪にも来てほしい」「日本のメダルラッシュ報道も賑やかだけど、難民選手の姿を見て浮かれていた自分をたしなめた」「シリアを空爆しているのは英米仏口だけど、日本も決して部外者じゃない」などといった書き込みが見

られます。

そしてブラジルからオリンピックのバトンを引き継いだ日本。

ヘイトスピーチやネット炎上などに代表されるように自分の考えと異なる人に対する強い偏見や排他的な風潮の強まりが「不寛容社会」と呼ばれることも多くなっています。

その一方で、東京オリンピックを見据えて、外国人観光客の誘致や外国人労働者の受け入れの制限緩和に向けた動きなど、多様な社会に向けた議論も活発になっています。

4年後の東京での“平和の祭典”に向け、私たちが今後、どのような国を目指し、どのようなメッセージを世界に向けて発信していくのか、その真価が問われています。

措置入院後の継続支援制度検討 国、兵庫の仕組み参考に 朝日新聞 2016年8月23日

相模原市の障害者施設での殺傷事件を受け、厚生労働省は措置入院の経験者を継続的に支援する制度づくりの検討に入った。先進的に取り組む兵庫県の仕組みを参考にすることで、塩崎恭久厚労相が21日、同県精神保健福祉センター（神戸市）の視察後、記者団に明らかにした。

昨年3月に同県洲本市で住民5人が刺殺され、措置入院を経験した男が逮捕された事件をきっかけに、兵庫県では4月に医師や保健師による「継続支援チーム」を各保健所に設置。措置入院患者を入院中から支援し、退院後も継続的に連絡を取る取り組みを始めた。塩崎厚労相は「全国どこへ行っても同じような医療継続が受けられるということを担保していくことが大事だ」と指摘。法整備や予算措置を含めて検討する意向を示した。

厚労省は有識者によるチームを立ち上げて、再発防止策の検討を進めている。容疑者に措置入院歴があったことから、退院後の支援体制のあり方が焦点となっている。（河合達郎）

障害者施設の防犯対策費、国が助成へ 相模原事件受け 朝日新聞 2016年8月23日

相模原市の障害者施設で発生した殺傷事件を受け、厚生労働省は施設の防犯対策にかかる費用を助成することを決めた。2016年度第2次補正予算案に118億円を盛り込む。23日に開かれた自民党の会合で、厚労省が明らかにした。

非常通報装置や防犯カメラ、フェンスなどの設置・修繕費用について、国が2分の1を補助。残りは都道府県や政令指定市、中核市といった自治体と施設の設置者が半分ずつ負担する。118億円にはグループホームなどの施設を整備する費用への補助も含まれる。

厚労省は措置入院後の支援強化といった制度面の再発防止策も検討しており、秋ごろに結論を出す予定。

補正予算案には、生活保護受給者を雇い入れた事業所への助成金制度の創設（金額未定）や、定年を廃止したり65歳以上に引き上げたりした事業所への助成金（6・8億円）も盛り込んだ。介護ロボットの実証研究費などとして4億円を計上する。（久永隆一）

女性の自閉症患者にも安全 ホルモン投与、福井大 共同通信 2016年8月23日

福井大などの研究チームは23日、対人関係が苦手な自閉スペクトラム症の症状を改善するとされるホルモン「オキシトシン」の臨床試験の成果を米科学誌電子版に発表した。チームによると、同様の研究で初めて女性患者の子宮の状態やホルモン値を観察。女性にも安全に使用できると確認した。自閉スペクトラム症は、自閉症やアスペルガー症候群の総称。厚生労働省によると、自閉症の発症頻度は男性が女性の4倍。男性患者が多いため、これまでの研究では女性患者への安全性は注目されてこなかった。

四肢まひの医師 流王さん講演 障害者差別をなくすには 山陽新聞 2016年8月23日

岡山大病院精神科医師の流王雄太さん＝岡山市北区＝は、高校時代に四肢まひの重度障害を負い、車いすでの生活を余儀なくされている。今春、障害を理由にした不利益をなくすため、障害者差別解消法が施行され、法整備は進んだが、施設面はもちろん、心のバリアフリーは十分とはいえないのが現状だ。同市内で行われた流王さんの講演には、誰もが暮らしやすい社会をつくるためのヒントがちりばめられていた。

障害があると、愚痴を言いたくなるような出来事と嫌になるほど遭遇する。たいてい我慢しているのだが、今回は聞いてほしい。

誰もが暮らしやすい社会の実現を訴える流王さん

20年以上前、就職活動で苦しんでいた時、岡山県内の自治体に就職できないか相談に行った。担当者は「自分一人で通勤できないと雇用できない」と言った。家族に車で送ってもらえば通えるのだが、駄目だという。最近になって論文を調べたところ、ほんの一部を除き、全国の多くの自治体で、このルールが残っていることが分かった。

他の会社ではこんなこともあった。私は情報処理の資格を持っているので、そういう関連の会社の採用試験に臨んだ。ところが、面接で「お客様の会社に自分の車で運転して行ける人を探している」と断られた。コンピューターをほとんど触ったことのない

ような人たちがシステムエンジニアとして雇われ、(仕事について) 詳しい私は、他の理由が優先されて雇ってもらえない。悔しかった。

エレベーターが怖い

大きめの電動車いすに乗って街に出掛けると、さまざまな問題にぶつかる。予約した店で、エレベーターが小さくて入れないということは日常茶飯事。乗れても、ボタンに手が届かないことがある。

ある日のこと、エレベーターのドアを開けて待ってくれる人がいたので乗り込み、降りる階のボタンを押してもらおうと思ったら、その人はそのまま出て行った。ドアが閉まり、自分ではボタンを押せない。次の人が乗ってくるまでじっと待つしかなかった。エレベーターはいまだに怖い。

スマートフォンやタブレットを使うのも大変。指での操作ができないので、私は特別な装具をつける必要がある。障害があるというだけで、人の何倍もお金がかかる。

米国には(建築物や道路の段差をなくしたり、雇用での差別を禁じたりした) ADA法という法律がある。内容的には日本の障害者差別解消法のようなものだが、ADA法の方が義務や罰則がはっきりしている。障害を理由に機会の平等を与えないことは差別だとし、就職面接の際に障害や病気の有無、重度を尋ねてはいけない。約20年前、米国に住んでいる親戚の家に数週間遊びに行った。山奥であろうと行く先々でエレベーターやスロープがちゃんとついていて驚いた。観光地でない普通の町でもだ。

日本のように事前に電話をして入れるか確認しなくてもいいし、入店を断られるのではと心配する必要もない。行きたい所に行けて、やりたいことがやれる。自分がどんどん元気になっていくのを実感した。

大切なのは相談

障害者差別解消法に出てくる「合理的配慮」について考えてみたい。内閣府が示した合理的配慮の事例をみると、ハードルの高いものが多い。具体例を挙げれば、エレベーターがない施設で移動する際にマンパワーでサポートするなど。これはどこでもできることではない。障害がある人に言いたいのは、あまり期待をしすぎないように、ということだ。実際に支援する方は相当大変。うまくいかなくても諦めてはいけない。

支援者側にも注意が必要。それは最初からあまり気合を入れすぎないことだ。そうしないと、本来できることも放棄してしまう“アレルギー”が出てくるのではないか。明らかにおかしいルールは早く変えてほしいし、誰でも簡単にできることはすぐに実行してほし



い。ただ、それ以外の問題は時間をかけて、みんなで工夫して合理的配慮を“育てていく”べきだと思う。

一番大切なのは、互いに意見を言って相談すること。支援者が一方的に考えても、当事者の望んでいることは違うかもしれない。障害の種類によっても分かることと、分からないことは違う。一緒に考えることが合理的配慮につながる。

7月24日、岡山市北区南方のきらめきプラザで開かれた障害者差別解消法施行にちなんだシンポジウムでの講演要旨。

障害者差別解消法 障害を理由とした差別を禁止する目的で4月に施行された。障害者本人や家族、支援者らから要望があった場合、費用面などの負担が過重にならない範囲で、障害者の社会的障壁を取り除く「合理的配慮」を国や自治体に義務付けた。民間企業には努力義務とした。

りゅうおう・ゆうた 高校1年の時、所属していたラグビー部の試合中に首を骨折。両手首や指先、両足が動かなくなり、車いす生活になった。岡山大大学院に進学後、山形県に車いすの医師がいることに勇気づけられ、医学を志す。2001年に医師国家試験に合格。07年には、仙台市の社会福祉法人が前向きに生きる全国の障害者を表彰する「ありのまま自立大賞」を受賞した。

三田市、認知症ガイドブック作成 支援制度を集約 神戸新聞 2016年8月23日



認知症の症状に応じたサポート内容を紹介したガイドブック

認知症の人や家族たちが利用できる医療・介護・福祉のサービス内容をまとめた冊子「さんだ認知症あんしんガイドブック」を兵庫県の三田市が作成した。イラストや図表を使い、分かりやすく編集。市内の施設や窓口に配り、支援する側から当事者へのアドバイスに役立ててもらおう。(山岸洋介)

認知症の進み具合や状態に応じたサービス提供の流れは「認知症ケアパス」と呼ばれ、それをまとめたガイドブックの普及を厚生労働省が進めている。

冊子では、認知症の疑いがある▽認知症だが自立生活できる▽見守りがあれば自立可▽生活に手助けが必要▽常に介護が必要—といった段階別に、受けられるサポートや制度を紹介。本人に加え家族への支援策も盛り込み、チャートで示した。

また基礎知識として、認知症の脳内メカニズムや心身の症状、予防策、成年後見制度も解説。「自尊心を傷つけない」「相手の言葉に耳を傾け、ゆっくり対応する」など、周囲の人が認知症の人と接する際の注意点も紹介している。

相談窓口の一覧や認知症の疑いに気づいたときのチェックシートを掲載したほか、別紙として医療機関の連絡先も添えた。

A4判16ページで、1500部を作成。A3用紙1枚の概要版も1千部作った。

地域包括支援センターと高齢者支援センター計6カ所▽医療機関121カ所▽居宅介護支援事業所26カ所▽認知症グループホーム4カ所—と、民生委員223人に配布。市ホームページでも公開し、希望者には市役所で配る。

担当者は「認知症を理解し、住み慣れた地域で安心して暮らすための一助になれば」としている。市介護保険課TEL079・559・5070

障害者自立先駆け、79年創刊の雑誌が来夏終刊 読売新聞 2016年08月23日

「そよ風のように街に出よう」23日

1979年に創刊され、障害者の自立と社会進出を訴えてきた雑誌「そよ風のように街

に出よう」(年2回発行)が来夏で幕を下ろす。障害者雑誌の先駆けとして、長らくタブー視されていた結婚や就職などのテーマに向き合い、最盛期には1万部を発行したが、障害



者を支える環境の整備が進み、終刊を決めた。読者からは「いつも勇気をもらえた」と感謝の声が寄せられている。

「そよ風のように街に出よう」の編集内容を話し合う小林さん(中央右端)ら(大阪市東淀川区で)＝守屋由子撮影

出版元は大阪市東淀川区の任意団体「りぼん社」。身体・精神障害者やボランティアの人たちが手弁当で取材と編集を担ってきた。

創刊当時は公共施設や交通機関でさえバリアフリー化が進まず、障害者の課題を取り上げる雑誌もなかった。それだけに、創刊号の特集は大きな反響

を呼んだ。テーマは「結婚・出産・家」。79年に初産をした脳性まひの女性へのインタビューを25ページにわたり掲載した。

女性は物心ついた頃から、将来を悲観する母親に「私より先に死ぬんやで」と言われて育った。健常者の夫と恋に落ちたが、夫は親から絶縁され、医師からは「産まないほうがいい」と告げられた。そんな境遇にありながら、女性は語った。「産みたいから産むんや。あきらめたらあかん」

編集部は「あるべき世界を共に築き上げよう」と毎号特集を掲載し、「労働」「性」「教育」などのテーマに取り組んだ。東日本大震災では、編集スタッフが発生直後に現地へ赴き、被災した障害者の声を聴いた。4回にわたって特集を組み、阪神大震災の経験が生かされていないとして、福祉避難所の整備や被災障害者の支援のあり方を訴えた。

投稿コーナー「今、こうして街に出ています」では、障害者の生活を写真付きで説明し、暮らしのコツなどを紹介した。90年頃には1万部を発行し、読者からは「1人で外出してみます」「私たちの声を代弁してくれてありがとう」などの手紙が絶えなかった。

終刊の話が持ち上がったのは昨年夏だった。編集スタッフの高齢化に加え、テレビやインターネットなど多様な媒体を通して障害者への理解は深まってきた。今年4月には、障害者への差別を禁じる障害者差別解消法も施行された。

副編集長の小林敏昭さん(65)は「障害者が外出しやすくなり、手助けしてもらおう風景も当たり前になった。これからは障害者が自ら先頭に立って活動していきだろう。未来へのバトンを引き継げたと思う」と話す。

長年の愛読者で全盲の東京都の女性(60)は、第1子を妊娠していた時、創刊号を知った。「介助者に読んでもらおう一文一文が胸に刺さった」と振り返り、「目が不自由でそよ風のように街には街に出られなかったけれど、希望すら持てない時代に強い気持ちを抱かせてくれた。今は2人の孫に恵まれ、命をつなげることができたのは『そよ風』のおかげです」と感謝している。

発行するのは残り2号で、年内に第90号、来夏に最終号を出す。いずれも読者や関係者からのメッセージを中心に構成する予定で、投稿を募集している。問い合わせは、りぼん社(06・6323・5523)。

◆「そよ風のように街に出よう」の主な特集

発行年	特集
1979年 (創刊号)	結婚・出産・家-重度女性障害者が新しい命を得て
81年	「労働」シリーズ:職場からの障害者排除と労働組合
82年	「障害者と性」シリーズ開始
83年	「学校」シリーズ:障害児いじめ、その悲鳴は何に向けられているのか
90年	「障害者と介護保障」シリーズ開始
2006年	「生きる力と教育」シリーズ:差別の文化に抗して
13年	「東日本大震災」シリーズ:これからの被災障害者支援のカタチ・行方を語り合う
14年	障害者解放運動のバトンは、リレーされたのか

